こどもの意見反映の取組事例集

横浜市

令和７年３月

こどもの意見反映の取組事例集　もくじ

●「こどもの意見反映の取組　事例集」の制作に際して …… P2

●事例

CASE 1　「こども、みんなが主役！よこはまわくわくプラン」へのこどもの意見反映（こども青少年局企画調整課） …… P3

CASE 2　社会的養護の「アフターケア」事業に反映するためのヒアリング（こども青少年局こどもの権利擁護課） …… P5

CASE 3　「横浜市特別支援教育推進指針」の策定に向けた特別支援学校に通う生徒向けアンケート（教育委員会事務局特別支援教育課） …… P7

CASE 4　未来の公園についての若者によるワークショップ（脱炭素・GREEN×EXPO推進局上瀬谷公園企画課） …… P9

CASE 5　大門小学校建て替えに際してのワークショップ（建築局学校整備課） …… P11

CASE 6　「ジモトガイド横浜市～消防局特集～」コンテンツづくり（消防局救急企画課） …… P13

CASE 7　「意見を聴く対象を決めつけない！」未就学児から大人まで共に描く子育てしたいまち（政策経営局経営戦略課） …… P15

CASE 8　本郷台駅前の花壇づくり（栄土木事務所下水道・公園係） …… P17

CASE 9　「ボイス・オブ・ユース（青少年の主張）」（南区地域振興課） …… P19

CASE 10　青葉区制30周年記念イベント　小学生を対象とした「1日区長体験」（青葉区区政推進課） …… P21

CASE 11　「にこまちプラン」啓発事業　～小学校への出前授業～（西区福祉保健課） …… P23

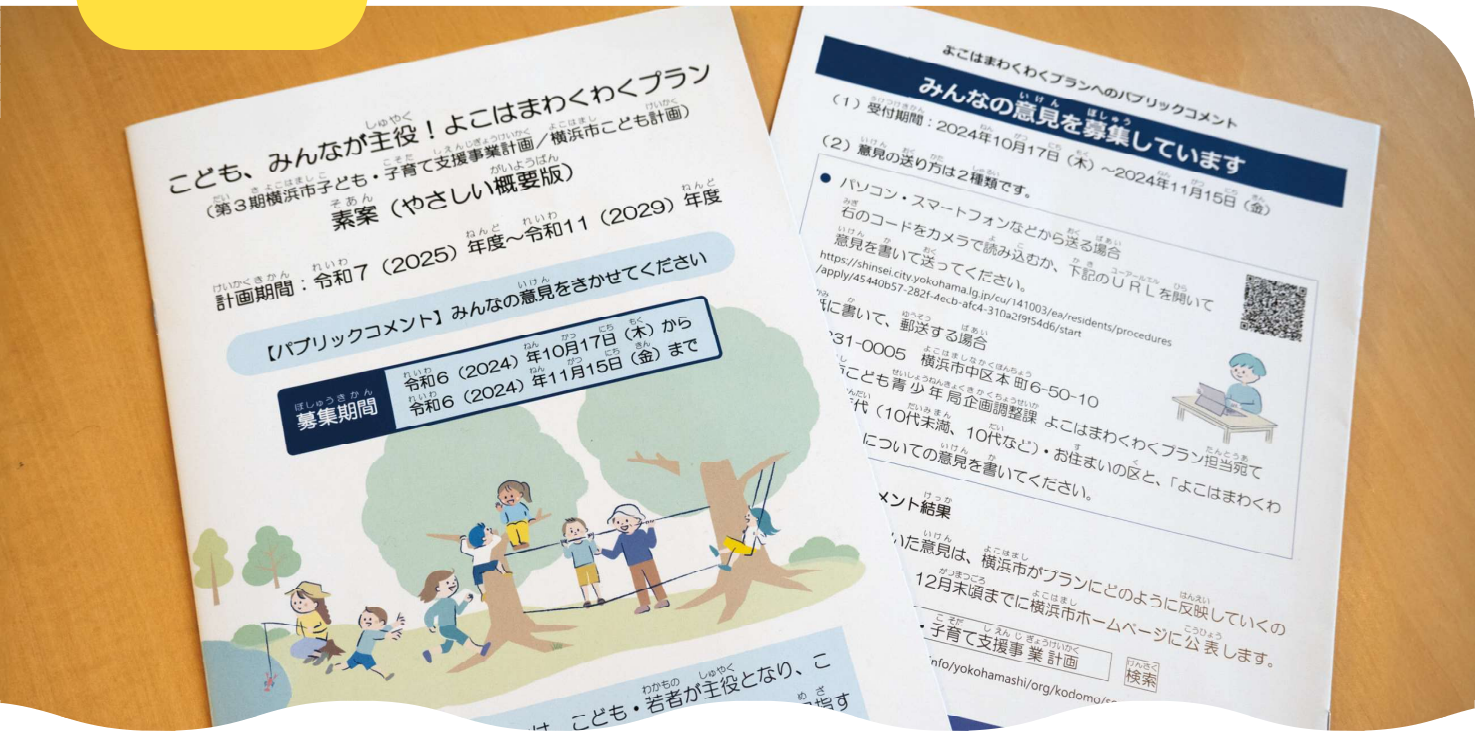
「こどもの意見反映の取組　事例集」の制作に際して

令和5年4月、あらたに施行された「こども基本法」。この法律では、全てのこどもが幸福な生活を送ることができる社会の実現を目指し、こども施策を総合的に推進することを目的に、こども大綱の策定、こどもの意見反映などが定められています。
令和5年12月には「こども大綱」が閣議決定され、全てのこどもが身体的・精神的・社会的に将来にわたって幸せな状態（ウェルビーイング）で生活を送ることができる「こどもまんなか社会」の実現を目指しています。
令和7年4月には本市において、「横浜市こども・子育て基本条例」が施行されます。条例では、こども・子育ての基本理念として、「全てのおとなは、こども基本法の精神にのっとり、こどもがその個性と能力を十分に発揮でき、社会を構成する一員として、その年齢及び発達の程度に応じて意見が尊重される環境を整備することが、誰もが未来への希望がもてる活力ある社会を構築するための基盤であるという認識のもと、相互に協力してこどもを育む社会の形成に取り組む」ことを掲げています。
これらの趣旨に基づき、本市として、こどもが対象となる幅広い施策・事業において、こども自身が直接意見を表明できる機会を積極的に取り入れることや、意見を施策・事業に反映させるなど「こどもまんなか社会」の実現に、全庁をあげて取り組む必要があります。
こども青少年局では、令和6年7月～8月に各区局統括本部あてに各区局統括本部において、既に取り組んでいる施策や事業にこどもの意見を聴く取組について照会し、いただいた回答の中から区局統括本部の参考となりうる好事例を選出し、事業所管課へ個別のヒアリングを実施。ご協力いただいた全11件を「事例集」というかたちでまとめ、各区局統括本部における今後の取組のご参考にしていただけるよう、広く共有できるようにしました。
各事例においては、事業立案から実施までのスケジュール感や、背景、ノウハウ、ポイント、課題・展望などをまとめております。ぜひ皆さまの部署でも本事例集をご参考に、施策・事業への「こどもの意見反映の取組」を推進いただけますと幸いです。

CASE 1

市民意見募集
（パブリックコメント）

「こども、みんなが主役！よこはまわくわくプラン」へのこどもの意見反映



「こども、みんなが主役！よこはまわくわくプラン」素案（やさしい概要版）

所管課　**こども青少年局企画調整課**

取組時期：2023～2024年度
参加者数：ニーズ調査（アンケート）回答 約13,000名、
パブリックコメント意見 約250名

取組の概要

横浜市のこども・子育て支援に関する総合計画「こども、みんなが主役！よこはまわくわくプラン」の策定に向けて、こどもの声を聴き計画に反映するための取組。ニーズ調査ではこども用ルビ版の調査票、パブリックコメントではやさしい概要版を作成し、こどもの意見を募りました。

取組の背景・経緯

「こども、みんなが主役！よこはまわくわくプラン（計画年度：令和7年度～11年度）」策定のため、市内約13万の子育て世帯を対象としたニーズ調査を行い、そのなかで小学4～6年生のこども本人に、ルビ版調査票での調査を実施し、計画素案に反映しました。また、計画素案に対するパブリックコメントでは、わかりやすい平易な言葉を使ったやさしい概要版を作成し、こどもの意見も募集しました。

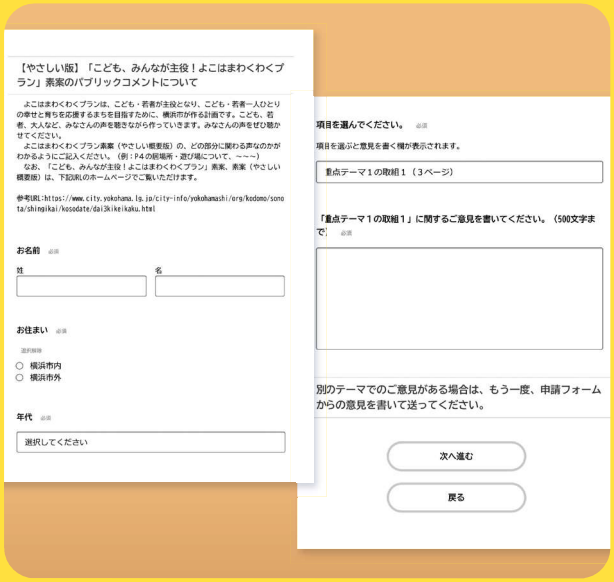
取組の実績

- 2023年に実施したニーズ調査では、対象となる小学4～6年生約3万3千人 のこどものうち、約1万3,000人が回答。調査結果を計画素案へ反映した。
- 2024年に実施した計画素案に対するパブリックコメントでは、10代未満から14件、10代から239件の声が集まった。

横浜市初！　やさしい概要版を使ったパブリックコメントの実施。

スケジュール／ノウハウ

- 2023年10月、子育て家庭の現状とニーズを把握するアンケート「ニーズ調査」を実施。保護者向け調査票のほか、こどもたち自身の考えを聴くこども本人向け調査票を同封。保護者向けとは別綴りの調査票とし、ウェブ回答のID/PASSも別々にした。
- 2024年10月、計画素案に対するパブリックコメントを実施。やさしい概要版を作成し、市立学校を通じて周知用のチラシを配布するなどして、広くこどもからの意見を募った。
- 内容を理解し回答できる年齢層として、小学校4年生以上を対象として想定した。



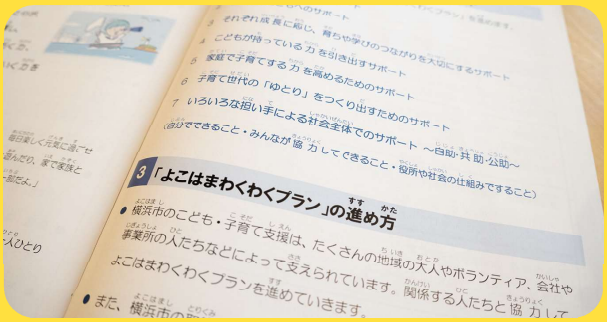
パブリックコメント入力画面

point 1 こどもにもわかりやすい資料を用いた初のパブリックコメント

横浜市としても、やさしい概要版資料を準備したパブリックコメントは初めての試み。どれぐらいの声が集まるか不安もありましたが、結果的には想定を上回る数の声を集めることができました。やさしい概要版の作成にあたっては、どの年齢層をターゲットにするかという点は、悩みながら検討したポイントになります。今回は中学・高校生が見ても大きな違和感をもたない小学4～6年生を想定しました。

point 2 やさしい概要版での工夫

大人向けの計画概要版は情報が多く、網羅的に知りたい人向けとなっています。こども向けの概要版を作成する際には、保護者向けの項目や、こどもにはあまり関係がないものを省く、単語を言い換えるなどの作業を行いました。たとえば「支援」を「助け」や「サポート」、「多様な」を「いろいろな」に言い換えたり、「温かい社会」の説明を補足するなど、わかりやすく表現する工夫を行っています。



やさしい概要版の工夫が見える部分

point 3 具体的な意見の内容

ニーズ調査では「大人に伝えたいこと」をテーマに自由意見を募集し、「こどもの意見の尊重に関する意見」や「屋内外で思い切り遊ぶことができる場所を求める意見」などがあがりました。パブリックコメントでは、「友だちと会話しながら教え合って勉強できる場がほしい」「公園でボール遊びができるようになってほしい」「身体を動かす場所がほしい」といった意見があがりました。

企画調整課の職員

こどもたちが「やりたい」と意見表明したことを尊重してほしいというご意見が、印象に残っています。パブリックコメントに意見を届けてくれているので、しっかりと考えをもっている方が多いとも言えるかもしれません。こどもたちの意見を、これから計画を推進するにあたって参考とするだけではなく、しっかりとフィードバックし、施策に反映できるものはしていく姿勢を見せていきたいです。

意見の取扱い

- ニーズ調査でいただいた回答や意見は計画素案に反映し、公表。
- パブリックコメントで、いただいた意見は計画への関連の有無にかかわらず、全てに市の回答を付し、横浜市ホームページで公表。

課題と展望

- パブリックコメントでこどもの意見を募集する際、今回は小学4～6年生を想定して資料を作成したが、場合によって数種類バージョンが必要となることもある。
- 「やさしい概要版」でも書かれていることの量が多いという意見もあった。
- いただいた意見は、必ずしも計画に関連するものばかりではないが、こどもの意見を施策に反映する方法の参考になるよう、会議の場や職員向けサイトなどで共有し、各区統括本部の取組の推進につなげたい。

CASE 2

ヒアリング

社会的養護の「アフターケア」事業に反映するためのヒアリング

B4S　PORTよこはまの様子

主管課

こども青少年局
こどもの権利擁護課

取組時期：2023年～
参加者数：社会的養護経験者（18歳以上）／計5名

取組の概要

児童養護施設や里親などの「社会的養護」の環境から社会に出た後、進学、就職、出産などを経験しているなかで、社会に出た後にどのようなサポートが必要か、2023年度にヒアリングを実施。さらに翌年度、社会的養護を経験した方、児童養護施設等に入所中の児童、施設等関係者などを対象に、匿名のウェブアンケートも実施しました。

取組の背景・経緯

「こども、みんなが主役！よこはまわくわくプラン」の策定に向けて、社会的養護経験者への支援拡充の検討を開始しました。社会的養護経験がある若者当事者の声を直接聴き、支援やサポートの内容を検討するため、ヒアリングを実施しました。

取組の実績

- ヒアリング参加者は全員20代で、男性3名、女性2名。ひとり1時間ほど。
- ウェブアンケートは約200名が回答。
- 社会的養護に関する支援ニーズ等について、実際の声を聴いた。

社会的養護を経験した方に、当時を振り返ってもらい「あったらよかった支援」を聞くことで、特にニーズの高い支援内容の把握に努めました。

スケジュール／ノウハウ

- 児童養護施設等の退所後児童のアフターケアを行う「B4S PORTよこはま」の運営を行っている「NPO法人ブリッジフォースマイル」と連携して実施した。
- 2023年7月からヒアリング項目の検討を行い、2023年10月に所管課の職員がヒアリングを実施。
- 話しやすい環境を整えるため、事前に聞かせてもらいたい内容を伝えるとともに、ヒアリングには同NPOの担当職員も同席した。

B4S　PORTよこはまのイベント

point 1 ヒアリングの内容は？

社会的養護下の中高生に対する支援や施設等を退所する際に必要な支援、現在の困りごとや不安に感じていることなどを聴きました。スマートフォン等の通信機器の利用制限の厳しさが、学校などで友人関係をつくるときに弊害となったことや、現在の困りごとに対する支援として、経済的な支援に加えてローンの整理や養育費に関する法律関連の支援を求める声などがあがりました。

point 2 話しやすい環境づくりをする

社会的養護経験のあるこどもたちは、「ここが安全かどうか」「自分の発言を相手はどう思うか」など、繊細な面を持ち合わせていることがあります。ヒアリングでは、「言いたくないことは言わなくていい」ということを事前に伝えるとともに、普段から関わりのあるNPOの担当職員にも同席してもらい、信頼できる大人が積極的に声を聴く姿勢を大切にしながら実施しました。

point 3 声を受けた具体的な取組

大人が必要だと思っている支援が、必ずしもこどもが必要としているものとは一致しないケースもあります。ヒアリングで受け止めたこどもたちの声は、令和7年度に、お金や離婚などについて弁護士に相談ができる「法律の相談支援」や、退職してアパートを出なくてはならないときなどに滞在することができる「一時的な居場所」づくりへの取組につながっています。

若者を支えるスタッフの皆さん

こどもの権利擁護課の職員

「ストレスが溜まるとお金を使いすぎてしまう」「職場での人間関係を円滑に築くことができずに職を転々としてしまう」といったケースや、施設を出ると児童相談所による心理的なサポートが受けられなくなり、精神的な支えを失ってしまうケースもありました。施設に入所していた方と比べると、里親家庭で養育されてきた方は、同じ境遇の人と知り合う機会が少なく、相談する相手がいなかったケースも。今回、実際の声を聴くことができほんとうに良かったです。

意見の取扱い

- 児童養護施設等の退所後に必要な支援の充実。

課題と展望

- こどもが職員に対して気を遣っている場合もあり、人間関係が良いからこそ話ができないという場合もある。
- 無理をさせることはできないが、より声をキャッチしづらい、自分のことを話すのが苦手なこどもの意見も聴いていきたい。

CASE 3

アンケート

「横浜市特別支援教育推進指針」の策定に向けた特別支援学校に通う生徒向けアンケート

イメージ写真

所管課

教育委員会事務局
特別支援教育課

取組時期：2023年度
参加者数：約400名（盲特別支援学校、ろう特別支援学校、高等特別支援学校等3校に在籍する高等部の生徒（1年生・3年生）

取組の概要

特別支援教育に通っているこどもたちの声を聴くため、市内の高等特別支援学校1～3年生と盲・ろう特別支援学校の生徒を対象に「学校生活を振り返って感じること（9問）」に関するアンケートを実施。

取組の背景・経緯

特別支援教育を取り巻く状況の大きな変化に対応していく観点から、横浜市の特別支援教育の目指す姿を、教職員や保護者等と共有し、児童・生徒一人ひとりの「豊かな学び」を提供できるよう「特別支援教育推進指針」策定に向けた検討を開始（2023年3月）。指針の策定にあたって、実際に特別支援学校に通うこどもの声を集めました。

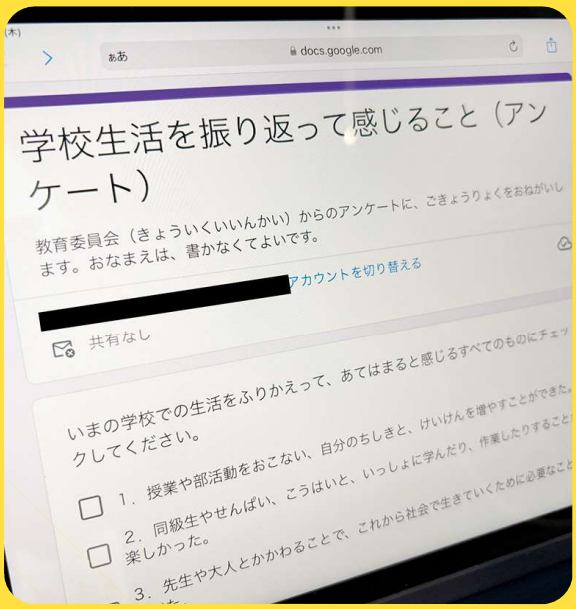
取組の実績

- 高等特別支援学校等3校の高校1～3年生、盲・ろう特別支援学校の生徒約400名の声を集めた。
- 主に朝の会の時間を活用し、学校の全面的な協力のもとオンラインアンケートに答えてもらった

インクルーシブのあり方について、現場の実感を聴く貴重な機会に。

スケジュール／ノウハウ

- 2024年1月末に校長会を通じて、特別支援学校へアンケート協力の依頼し、2024年2月に生徒向けのオンラインアンケートを実施
- アンケート作成から実施まで主管課で対応。
- アンケート項目は教員である指導主事と相談しながら検討。



オンラインアンケートの画面

point 1 行政が推進する「インクルーシブ」と現場の実感

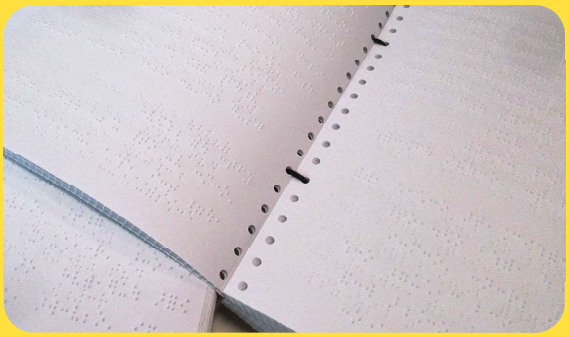
横浜市では、多様な学びの場があり、積み上げてきた強みを生かした「横浜らしいインクルーシブ教育」を推進していこうと考えています。障害の状況によっては、実際には学ぶスピードも内容も違います。小・中学校では個別支援学級に分かれて学ぶほうが安心できるという声が、アンケートでは一定数ありました。行政が推進することが、現場で学ぶこどもたちの思いと必ずしも一致しないケースがあることがわかります。

point 2 音声読み上げ機能、点字版も活用

盲特別支援学校の生徒の声を集める対応も行いました。弱視のこどもはタブレット端末等の音声読み上げ機能を活用しました。また、音声読み上げ機能での対応が難しい生徒のため、所管課において市役所内にある点字器を使い、点字版アンケートも制作しました。

point 3 具体的に集まってきた声について

学校生活については「同級生とカフェをやりたかった」「先輩ともっと話したかった」といったこどもらしい意見や、「現場実習や働き方をもっと学びたかった」「給料や保険、税金のことをもう少し学びたかった」などの意見もあげられました。特別支援学校高等部の1～2割程度の生徒が、小中学校時代に一般級で一緒に学ぶことが難しいと感じる生徒がいることも把握できました。



所管課が作成した点字版アンケート

特別支援教育課の職員

小中学校の個別支援学級のこどもに聴くのが難しかった理由として、支援級の子、一般級の子、それぞれの立場を分けて聴くことが差別的に捉えられる懸念がありました。一緒に学ぶとき、どういうところが難しく、どんなことであれば一緒にできるのか。クラス単位で実現可能なインクルーシブの方法を、導き出していく必要があります。支援級の子が、落ち着かない様子のときに、一般級の子がその状態を理解できるような指導も必要ですね。

意見の取扱い

・アンケートでいただいた生徒意見の学びたかったこと等について、今後の学校運営・学校支援に生かしていく。
・「特別支援教育推進指針」を策定（2024年3月）し、今後の学校運営や学校支援の取組の中で反映していく。

課題と展望

・今回は対象外となっている一般級の生徒の声や、より重度の障害のあるこどもたちの声を聴くことについても引き続き考えていく必要がある。
・これからインクルーシブ教育の実現に向けたモデル的取組を進めていくにあたり、児童が感じていることも十分考慮し、個別支援学級や特別支援学校の交流の在り方等を研究・検討を進めていきたい。

CASE 4

グループワーク

未来の公園についての若者によるワークショップ

高校生によるワークショップ

主管課

脱炭素・GREEN×EXPO推進局 上瀬谷公園企画課

取組時期：2023年度～
参加者数：高校生、大学生／計44名（2023年度）

取組の概要

GREEN×EXPO2027の会場跡地に計画している（仮称）旧上瀬谷通信施設公園の検討にあたり、環境問題に関心のある高校生・大学生を対象にワークショップ形式のヒアリングを実施。

取組の背景・経緯

公園の計画の検討を進めるにあたり、若者の新しい視点や感性・アイデアを取り入れていくために、2023年8月からワークショップ形式の対話を企画・実施。
2024年3月に取組テーマを「環境」と「防災」とした「新しい公園」構想骨子を策定。2024年度も計画の具体化に向け対話を継続。

取組の実績

- 2023年8月に高校生9名に1回、同年12月に大学生35名に1回ワークショップを実施。ワークショップは1時間30分／1回。
- 高校生のアイデアをイラスト等でとりまとめた資料を作成し、構想の検討の参考にすることを伝えるためのフィードバックの会を2023年12月に実施。
- SDGsや環境問題に関心のある若者の等身大の意見を聞くことができた。

横浜市の関連事業等との連携により実現しました！

スケジュール／ノウハウ

- 関連部署と連携した高校生への働きかけ（2023年6月頃～）と、大学へ出前講座に関する調整（2023年6月頃～）。
- 2023年度に「若者」の声を聴くワークショップを企画し、同年度8月・12月に実施。
- ワークショップの企画や当日の進行・ファシリテーターの役割は上瀬谷公園企画課が担った。
- 話をしたことがない人同士がグループになるときは、職員が声がけをするなどの対応を行った。
- ワークショップ当日は横浜市職員3名、委託業者で対応。
- ワークショップの意見等を取りまとめる、意見のイラスト化等については委託業務で実施。

高校生によるワークショップ

point 1 それぞれのワークショップの進め方は？

高校生によるワークショップでは、事前に概要説明を行い、ワークショップまでの宿題として気候変動や生物多様性に配慮した「未来の公園の姿」のアイデアシート作成してもらいました。ワークショップ当日は、①アイデアの共有、②アイデアのグループ化・再整理、③発表を行いました。また、大学との包括連携協定に基づき、環境活動に関するオムニバス講義1枠を活用し、「仮称）旧上瀬谷通信施設公園の理想像」について6つのグループで検討・アイデアをまとめました。

point 2 しっかりとした、率直な意見

ワークショップでは、「規格外の野菜も出品される地産地消マーケットが開催される公園」や「自給自足農園」、「花や樹木を植えるイベント」、「収穫できるグリーンカーテン」、「自然観察ツアーができる公園」などの環境面を真剣に考えたアイデアがあがりました。同時に、「スポーツを通じた交流ができる」、「写真を撮りたいカフェがある」などの「今まで通りの公園」の要素やトレンドをおさえた要素もあると良い、といった率直な意見も聴くことができました。

point 3 意見の可視化と反映

高校生が考えた「未来の公園の姿」のアイデアを、イラストで表現し、フィードバック会を実施しました。また、公園が“環境問題についての学びのきっかけ”“自然に興味をもつきっかけ”にもなりうるという、新しい視点も得ることができました。こういった対話のなかで出たアイデアやイメージを受け止め、計画等の検討に役立てていきます。

「未来の公園」のアイデアをまとめたイラスト例

上瀬谷公園企画課の職員

未来の公園をつくるにあたっては、次世代を担う若者に積極的に意見を聴き、若者にも将来に渡って利用したいと思ってもらえるような公園にしていきたいと考え、本市の関連事業とも連携しながら高校生・大学生にアプローチしました。若者から得られた新しい視点や具体的なアイデア、普遍的なニーズ等を計画の検討の際に参照しイメージしながら、引き続き業務を進めていきたいと思います。

意見の取扱い

・いただいたアイデアは、今後の「新しい公園」についての計画検討の参考にしていく。

課題と展望

・意見を聴いた若者たちに、どのように計画等へ反映したかをフィードバックすることも重要。
・今後は、意見を聴く年代の幅もを広げていくことを検討する。

CASE 5

出前授業

大門小学校建て替えに際してのワークショップ

こどもたちが立てた旗（地域のなかで好きな場所）

主管課　**建築局学校整備課**

取組時期：2024年度
参加者数：小学5年生および2・3年生　計約100名

取組の概要

小学校の建て替えに際し、こどもたちが使いやすく愛着がもてる学校建築の実現や、こどもの学校や地域への思いを設計事業者が理解を深めることを目的として、基本設計の段階でこどもの声を聴くワークショップを実施しました。

取組の背景・経緯

学校建て替えは教育委員会事務局教育施設課からの依頼を受けて、建築局で設計委託を行っています。建て替えの設計業務等を受託した設計事業者から、こどもたちの声を聴きながら設計を進めたいという提案がありました。小学校の建て替えにあたっては、児童やご家族との良好な関係が大切です。このような事前ワークショップを経て、相互の理解を深めていくことで、行政と学校が連携し、愛着をもてる学校づくりに取り組む土台をつくりました。

取組の実績

- 最初の2回は設計事業者を講師に招いてワークショップの前段となる授業を行い、3回目に体育館で全4時限（午前中いっぱい）のワークショップを行った。
- 授業は2024年6月28日・10月22日、ワークショップは10月24日に実施し、計3回のプログラム構成となった。

建築局、設計事業者、学校の3者が密に連携し、スムーズに実現！

スケジュール／ノウハウ

- ワークショップでは、大学生等のスタッフが声掛けするなど、こどもたちが意見を言いやすくなるようフォローしながら実施
- 設計事業者からの提案を受け、建築局から小学校の校長先生へ相談。総合的な学習の時間を活用し、こどもたちのための授業と、こどもの意見を聴く取組の両側面をもちながら実施した。

ワークショップの様子

point 1 ワークショップの内容

レクチャーは「建築家の仕事」「学校の建て替え」のテーマで実施。自分たちの学校の建て替えに際し、こども自身が意見を伝えようという心構えをもちワークショップに臨むプロセスを踏みました。ワークショップは体育館に「学校」と「地域（学区）」それぞれの大きな地図を広げ、こどもたちが「思い出の場所」「紹介したい場所」「好きな場所」を付箋に書き、それを旗に見立てて地図に置くゲーム感覚も取り入れつつ、設計事業者のスタッフや建築局市職員がこどもと対話をしながら声を集めました。

point 2 集まった声をどう反映していく？

こどもの学校への思いとして、「富士山の眺望」「図書室に個室があるといい」「畑で育てているナスへの愛着」といったものから、校舎やエレベーターのカラーリングまで、さまざまな声があがりました。校舎の一画に落ち着ける場所をつくろうと考えていた設計事業者も、その必要性を感じることができ、使い手の思いを把握して今後の設計業務などのなかでこどもの意見を反映していきます。

point 3 教育委員会の視点

小学校の建て替えは、設計から竣工まで約10年かかるため、新しい学校との関係が生まれにくい在校児童にとって、今回のワークショップは、未来の学校に向けて自分たちの意見が反映される貴重な機会になりました。横浜市こども・子育て基本条例も制定され、今後も積極的に今回のような取組を進めていきたいと考えています。

ワークショップの様子

教育施設課・学校整備課の職員と大門小の先生

これまでの建て替えでは、工事中の学校を見学する機会をもつことはありましたが、今回のような工事前の大規模なワークショップは初めての試み。使う立場にあるこどもたちと実際に話をしてみて、想像していたよりずっと、こどもたちがちゃんとした意見をもっていることにも驚きました。
学校現場の皆さまに、建て替えはネガティブに捉えられがち。工事に入る前からの信頼関係をいかに築くかが建て替え成功の鍵になる。ワークショップはその方法のひとつです。

意見の取扱い

- 設計事業者による計画段階でこどもの意見を聴き、設計に取り入れ、完成する学校に反映する。

課題と展望

- 今回午前中いっぱいワークショップができたのは異例のこと。小学校のカリキュラムが前年度に固まるため、早い段階での調整が必要となる。
- 今後の学校の建て替えもこどもの声を聴きながら進めていきたい。

CASE 6

ロールプレイ

「ジモトガイド横浜市 ～消防局特集～」コンテンツづくり

ワークショップに参加したこどもたち

主管課　**消防局救急企画課**

取組時期：2024年度
参加者数：市内在住・在学の小学校5年生
および6年生計7名

取組の概要

子育て世代の救急に対する理解を深めるためデジタルガイドブック「ジモトガイド横浜市～消防局特集～」を制作。こどもに多い急な病気やけがを防ぐための情報やこども記者となったこどもたちが消防局を取材し、こども目線で発見した消防局の魅力をコンテンツに反映しました。

取組の背景・経緯

救急要請の割合が高いのが、高齢者と乳幼児です。乳幼児をもつ子育て世代に「予防救急」を伝えるため、全国で多くの子育て世代の情報ツールとして利用されているこども向け知育アプリ「ごっこランド」内にコンテンツを制作しました。

取組の実績

- 横浜市ホームページ、消防局や委託事業者のXを通じて2024年4月12日～4月19日に募集。
- ワークショップは4月27・28日の2日間にわたり開催（いずれも9時～12時）。参加者はこども記者として、1日目は消防局新本部庁舎の見学、2日目は市民防災センターのツアーに参加し、取材内容を発表。

「こども記者」という役割を与えたことで、見学も主体的に取り組む姿がありました！

スケジュール／ノウハウ

- 年度当初から企画をして、9月9日（救急の日）をリリース日に設定したため、こども記者の募集、ワークショップの実施及びコンテンツ制作は全てスピード感のあるスケジュールとなった。
- 当日は、こどもの意見を引き出しやすくするため、委託事業者のスタッフ2名がファシリテーターとして参加。
- 「こども記者」という役割の中で、こども自身が感じた気づきや、消防局の魅力をこどもの声として聴きとり、コンテンツに反映した。

会議室のマイクシステムを体験するこどもたち

point 1 きっかけは日常生活のひとコマ

アプリコンテンツ制作のきっかけは、二人のこどもをもつ消防局職員の日常のできごとからでした。職場では救急要請割合の高い乳幼児をもつ子育て世代にどうやって「予防救急」を伝えていこうかと考えていたときのこと。ママ友と子連れで会食したとき、こどもたちが「ごっこランド」で遊んでいました。こんな風にアプリを通して知ってもらえば、予防救急の認知が広まるかもしれない――。そんなアイデアが実を結び、コンテンツになりました。

point 2 こども記者としてツアーに参加

消防局新本部庁舎では消防ヘリコプターが離着陸する屋上や、災害時に消防局長などが対応の方針を決定する会議室での会議を体験し、市民防災センターでは地震の揺れなどが体験できるツアーにこどもたちが参加。取材後は、消防局に関するクイズを発表し合いました。クイズや写真は、実際のコンテンツ内で消防局の魅力として使われています。

point 3 双方向的なコミュニケーションを大切に

消防局職員の一方的な説明にならないよう、こどもたちへ質問を交えながら、こどもたちが考えていることを最大限に引き出すよう工夫しました。

アプリに掲載されているなぞなぞ

救急企画課の職員

コンテンツ制作に際しては、デジタル版地域体験ガイド「ジモトガイド」を手がけている東京の事業者に、委託しました。予算は基本戦略枠からの拠出です。ジモトガイドは、1つの自治体につき1コンテンツという決まりがあり、他自治体は観光に関わる部署で制作しているケースが多いです。ワークショップでは、ふだん一般の方が入れない場所を案内したりすると、こども記者としての興味も高まり、大人にはない視点がどんどん出てきたことが印象に残っていますね。

意見の取扱い

・「ジモトガイド横浜市～消防局特集～」コンテンツに、こどもたちが撮影した写真やこども記者のツアーの際に発表したクイズを反映している。

課題と展望

・多くの利用者がいる「ごっこランド」内にコンテンツをつくることで、子育て世帯に効率的に予防救急をPRすることができている。
・今回のこどもたちの意見は、消防局が実施している小学校3・4年生の防災教育や、中学生の救命講習といった教育プログラムなど、別の施策の際にも参考にする。

CASE 7

フィールドワーク

「意見を聴く対象を決めつけない！」未就学児から大人まで共に描く子育てしたいまち

発見したこと、感じたこと、やりたいことを絵を描きながら表現する未就学児　©2024 Nobuhiro Tamakoshi

主管課　**政策経営局経営戦略課**

取組時期：2024年
参加者数：未就学児（4歳～）・小学生／保護者等／計約30名

取組の概要

「子育てしたいまち推進モデル地区」の青葉区美しが丘公園周辺エリアにおいて、こどもや保護者の声を聞き、施策を検討するワークショップを開催。こどももまちを構成する当事者であり、未就学児を含め、地域のこどもと大人が一緒に参加し、施策を検討する手法の確立と施策の実装を目標としたチャレンジングな取組。

取組の背景・経緯

令和5年度に実施した「子育て世代の日常生活に関するインサイト分析調査」では、今後の子育て施策の新たな方向性として、子育てが楽になるだけでなく、こどものいる生活が楽しくなるような施策の展開を目指すことで、親子の幸せを実現できるのではないかとまとめた。この調査結果を踏まえ、親子が日常生活の中で、より笑顔になれる取組を当事者と一緒に考えたいとの思いから実施。

取組の実績

- ワークショップではフィールドワークやグループワーク等を実施。
- 4歳の未就学児から小学生が17名、保護者等を含めると約30名が参加。
- 運営スタッフは、職員、委託事業者、こどもの意見を引き出すためのアドバイザーで構成。
- こどもの声をそのまま受け止め、それらの意見が実現した架空の街を描いた3つのストーリーに集約するとともに、関連する取組を実装。

未就学児を含めて、こどもから意見を聴取していくことは把握できる限りで本市初！

スケジュール／ノウハウ

- ワークショップの準備から実施は半年程度。7月頃から打合せをスタートし、9月下旬と11月上旬に計2回実施。
- 企画・運営は、コンサルティングするだけでなく、共に考え、行動する、政策実装の支援業務実績のある事業者に委託。参加者は地域の子育て支援者経由で募集。
- ワークショップ開催前に、こどもの声をどうキャッチするか、こどもに対する接し方や向き合うときのポイントなどを伝えるため、参加する大人に事前研修を実施。

©2024 Nobuhiro Tamakoshi

「フィールドワーク」では美しが丘公園周辺を歩きながら、
普段感じている思いを共有し合った。それぞれにファシリテーターや記録係がついて、
会話を細やかに拾っていった。

point 1 ワークショップの内容・進め方

フィールドワークでは、幼児・小学生・大人のグループに分かれて美しが丘公園周辺を歩きながら、マップに好きな場所・怖い場所・よく行く場所などのシールを貼り、普段の思いを表現してもらいました。その後のグループワークでは、粘土やクレヨン、折り紙やペンなどのツールを用意し、未就学児でも表現できる環境を整えました。また、こどもたちにのびのびと意見を語ってもらうため、小学生チームにはファシリテーターが質問しながら動画を撮影し、その動画で発表してもらう等の方法も実施しました。

point 2 大人のマインドセットをどうつくる？

こどもと向き合うために、大人がこどもを「一人の主体として尊重する」マインドセットを整える機会をワークショップ実施前に設けました。例えばこどもと大人の間に仕切りを設置したり、スーツなどの威圧的な服装や、所属や肩書きを含んだ呼び名の使用を避けたり、話すときはこどもの視点までかがんだりするなどの工夫をして、こどもの心理的安全性を担保しました。

point 3 具体的に集まった声

「まちにゾンビ、お化けがいたらおもしろい」「遊具も何もない空き地があったらいいな」「公園で焚き火ができるとおもしろい」「習い事にいくとき知らない人の車には乗りたくない」等の自由な発想に基づく意見をそのまま受け止め、それらの意見が実現した街を描いたストーリーをまとめました。

©2024 Nobuhiro Tamakoshi

未就学児は紙粘土を使いながら「こんなまちがいい」「こんなのがあったら楽しい」と教えてくれた。

©2024 Nobuhiro Tamakoshi

小学生チームはぬいぐるみに「代弁」させる形で発表した。
自分ではない存在に語らせることで、スムーズに意見を言える子もいた。

経営戦略課の職員

保護者からは「迎えに来たとき、こどもたちが自信にあふれた表情をしていた」というお声をいただきました。自分の意見が報告書に反映され、フィードバックされることが、こどもの自己肯定感や自己効力感の向上につながるということを改めて感じました。また、今回のワークショップを進めていく過程で学んだ工夫や心構え等を「こどもが主体的に参加する場をつくるためのミニ実践ガイド」としてまとめましたので、ぜひさまざまな方に活用してもらいたいです。

意見の取扱い

- 「こどもが主体的に参加する場をつくるためのミニ実践ガイド」を作成。
- ワークショップでいただいた意見を基に、子どもを遊ばせながら子育ての悩みなどを相談できる場（子育て支援者会場）を、こどもログハウスに新たに設置する等、取組の実装を検討。

課題と展望

- こどもは大人がいる環境において、自然と大人が求めていることを想定・忖度して発言することがしばしばあるため、こどもが安心して過ごし、表現できる環境を整えることが必要。
- 取組を進めるうえでは、「大人の都合」、社会生活の中で大人の間で暗黙のうちに共有されている価値観や常識がその前提として入り込むことが少なくないため、「こどもの都合」を踏まえた思考に切り替えることが重要。
- 未就学児を含めて、こどもが政策立案プロセスに当事者として参加できる工夫や心構え等をまとめた「こどもが主体的に参加する場をつくるためのミニ実践ガイド」が類似の取組が行われる際の活用を期待。

※本取組の写真は、『みんなの「やりたい」から始まる
まちの政策デザインラボ実施報告書』から引用しています。

CASE 8

出前授業

本郷台駅前の花壇づくり

完成した駅前花壇

主管課

栄区栄土木事務所
下水道・公園係

取組時期：2023年度および2024年度
参加者数：横浜市立本郷台小学校6年生約90名

取組の概要

2027年に開催される「GREEN×EXPO 2027」の機運醸成を目的としながら、日本の造園文化の発信と造園技術の継承として本郷台小学校の6年生とともにワークショップを実施（2024年度の取組）。日本の庭園をテーマに栄土木事務所が出前授業を行い、こどもたちが実際にペイントした石をいたち川を表現した花壇に設置しました。

取組の背景・経緯

栄土木事務所には、総合的な学習の時間に出前授業をしてほしいという要望が、区内の小学校から届きます。2023年度には本郷台小学校からの声がけで、栄区のシンボルリバー・いたち川沿いに桜の樹を植える「植樹式」を協働して実施。今年度は栄土木事務所から同校へ働きかけ、こどもたちとともに本郷台駅前の花壇づくりについて、ワークショップを実施しました。

取組の実績

- 2023年度「植樹式」・2024年度「本郷台駅前花壇づくり」のいずれも現場が通学区域である本郷台小学校とともに「GREEN×EXPO 2027」機運醸成の一環として事業を実施。
- 出前授業を通して、花壇づくりに向けた、こどもたちの意欲を醸成するとともに、こどもたちと直接対話をする機会をつくった。

小学生が出前授業で学び、花壇づくりを通じたまちづくりに参加！

スケジュール／ノウハウ

- 2023年度に事業計画を立て、2024年4月より具体的な実施に向けて計画をスタート。
- 2024年度の事業では、区政推進課を通じて本郷台小学校への声がけを6月に行った。秋は小学校のイベントが多いため、12月と3月に出前授業を実施した。
- 出前授業の内容に関する小学校との打合せは計3回ほど実施した。
- 小学校とのやり取りは基本的に、土木事務所と学校がメールで行い、詳細は打合せをとおして内容を詰めていった。

出前授業の様子

point 1 伝統×新しい解釈のハイブリッド

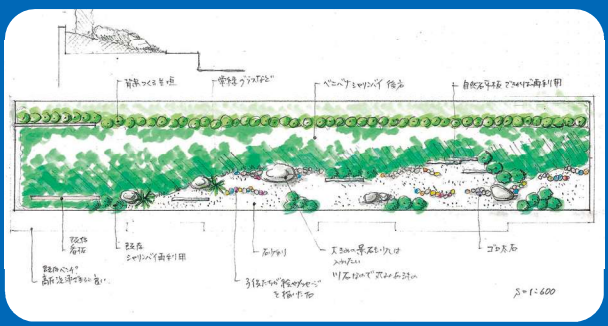
自然の大切さを伝えたいという思いから、区内のシンボルリバーである「いたち川」を表現することに。「GREEN x EXPO 2027」の趣旨に沿って、日本の造園技術を次世代に継承できるよう、日本庭園の伝統的な様式である枯山水の技法を花壇づくりに取り入れました。出前授業では造園業者が枯山水について解説。こどもたちからは、枯山水には「色をつけてもいい？」「生き物を描いてもいい？」と固定概念のない、自由な発想の声があがりました。

point 2 造園業者とともにつくった出前授業

これまでの出前授業は栄土木事務所が単独で行ってきましたが、今回は「つくる人の話が聞きたい」という学校からの要望を受け、造園業者とともに組み立てました。造園業者が使っている道具を実際に見せてもらうなど、「花壇づくりに参加する」リアリティをこどもたちが感じる内容に。学校の助言も踏まえ、6年生は大人向けの説明も理解できるので、かみくだきすぎない内容にしました。

point 3 まちへの愛着をもってもらう

目的は「GREEN×EXPO 2027」の機運醸成ですが、こども自身の関わりが目に見えるかたちで花壇づくりに反映されることにより、こどもたちにまちへの愛着をもってもらうこと、地域を大切にする気持ちが生まれることを目指しました。花壇は駅前の人目につく場所にあるので、小学生がつくったものと知れば往来する人も関心をもち、多くの人に栄区に愛着をもってもらえることを願っています。



土木事務所職員が描いたデザインの素案

栄区栄土木事務所の職員

「GREEN×EXPO 2027」を知っていますか？　と聞くと、ほとんどのこどもが手をあげて反応をくれたのがうれしかったですね。花壇のデザインは、土木事務所の職員が絵を描いて素案をつくりました。「枯山水」という日本の伝統にふれながら、固定概念にとらわれず、庭造りの楽しさを伝えられたら良いと考えました。土木事務所には、過去の工事で出た石があり、それらを再利用して取り組めたこともよかったです。

意見の取扱い

- こどもたちが「いたち川」をテーマに石にペイントし、花壇のどこに配置すると良いかを考えてもらい、一緒に設置した。
- 日本の伝統や、造園技術を学びながら、花壇づくりへの参加を通してまちへ愛着をもってもらうプロセスとなった。

課題と展望

- 出前授業やイベントのスケジュールは、小学校の行事などの都合にあわせて調整していく必要があるため、学校との連絡を密に取りながら進めた。
- 今回の取組も踏まえ「GREEN×EXPO 2027」に向けた取組だけでなく、様々な場面でこどもの声を聴く取組を検討していきたい。

CASE 9

朗読・表彰式

「ボイス・オブ・ユース（青少年の主張）」

作文の朗読を行う入選者

主管課　**南区地域振興課**

取組時期：1981年～（44回開催、コロナ禍は一時中止）
対象：南区内在住・在学の小学生3～6年生、中学生、高校生、一般（20歳まで）
応募総数：計1,522編（うち入選数69編）

取組の概要

青少年の思いや考えを表現した作文を募集し、入選者はみなみん（南公会堂）で表彰および朗読を行うプログラム。横浜市内唯一の取組で、半世紀に及ぶ歴史をもつイベント。1999年からは司会や受付など会の運営にも、こどもたちが積極的に参加。

取組の背景・経緯

こどもたちの声を聴き、それを共有し理解することで、大人たちが歩み寄りながら地域のこどもたちを支えていくことを目的としてスタートした事業です。本事業を通じて青少年の成長を見守り、「こどもまんなか社会」の実現を目指します。

取組の実績

- 今年度の小・中・高・一般の部での募集のうち、小学生の部は、南区の全児童数約7,000人のうち約700人が応募しており、区内の1/10にのぼる児童が応募している。
- 作成した作文集は、区内の学校図書館、地区センターなどで貸出・閲覧ができ、区のWEBサイトでも公開。

こどもたちの思いや考えを、直接伝える場を実現しています。

↑作文集はこちら

スケジュール／ノウハウ

- 実施前年の1月ぐらいから次のテーマの検討会議に入る。
- 半年程の調整期間を経て、募集開始。募集期間は8月。夏休みの宿題として設定している学校もある。9月中旬までに2回の選考会を実施し、10月に入選作品が決定。12月に朗読・表彰式を実施。
- 毎年、市立の小学校・中学校には、校長会を通して、チラシの配布や掲示で参加の募集を呼びかけている。

会の運営に携わるボランティアのこども達

point 1 運営主体は地域団体

本イベントは「南区青少年指導員協議会」が主催し、南区地域振興課が事務局を担っています。また、地域団体が「こどもたちのために」という思いから、半世紀にわたり主体的にボランティアで運営を継続していることが特徴です。作文の審査を担うのも、青少年指導員の方たち。3人1組で1,500編以上の作文を読み、1次・2次と審査を経ての選定は、容易なことではありません。地域の方たちのこどもたちへの思いがあふれる事業です。

point 2 こどもたちの思いを地域へ届ける

2024年度の作文テーマは「大人になった自分への手紙」「私の好きな南区」「ルールとマナーについて」「自由課題」。テーマも毎年、青少年指導員が検討しています。今年は特に商店街や地域の方の見守り隊への感謝の思いや、地元の行事への参加を通じて魅力を引き継いでいきたいといった声が印象に残りました。こどもたちの声を見える化し、行政・地域の関係各所に届けることで、こどもの声をまちづくりに活かします。

point 3 自分の思いを伝える場

入選作品には、吃音について知ってほしいと発信する児童の作文もありました。ふだん感じていること、伝えたいことをつづった作文の朗読は、聴く人の胸を打ちました。南区は外国籍のこどもが多い地域で、日本語で作文を書くため、多文化共生ラウンジと協働し、どう日本語で表すのかを相談できるサポートも行っています。このようなサポートを活用し、毎年10名ほどの応募があります。

受付、バックステージやステージ上で運営をサポートするこども達

南区地域振興課の職員

短いテキストで発信するSNSが主流のなか、作文用紙に1,200字で自分の思いを表現するのは貴重な機会。「ボイス・オブ・ユースへの応募をきっかけに、自分を振り返り、あらためて自分の思いや考えに気づいた」という方もいました。作文をきっかけに、自分の将来のことや、住んでいるまちのことをふりかえる機会となっていることがうれしいです。

意見の取扱い

- こどもたちの思いや考えが掲載されている作文集を、庁内、関係施設や自治会町内会へ送っている。
- 朗読を聴きに来てくれた方が、地域に帰って、紹介してくれている。

課題と展望

- 少子化の時代、応募者数をどう増やしていくか。
- 運営ボランティアの参加が増えたときに、いかにスムーズに行うか。うれしい悲鳴ではあるが、今年度はその対応に時間を要した。
- 私的な内容を含む作文や個人を特定されるような内容があった場合には、慎重に確認を進めていく必要がある。
- こども自身が、自分のことを振り返るよい機会にもなっていると感じているため、引き続き、同事業を続けていく。

CASE 10

職業体験

青葉区制30周年記念イベント 小学生を対象とした「1日区長体験」

発表するこどもたちと区長

主管課　**青葉区区政推進課**

取組時期：2024年8月
参加者数：青葉区の小学生（2～6年生）／計8名

取組の概要

「青葉区制30周年魅力体験イベント」の一環として、こどもたちが1日区長になりきり「自分が区長になったらこんなことをしたい」といったアイデアを出してもらう「1日区長体験」を実施。

取組の背景・経緯

青葉区制30周年のキャッチフレーズ「未来へつなごう青葉の魅力」にもあるように、こどもたちに「ふるさと意識」をさらにもってもらえるような特別な体験をしてもらいたい思いから、2023年10月より計画をスタート。1日区長として区役所の業務を知ることによって、区政への関心をもってもらうこと、また地域への愛着を育むことを目的に、体験イベントとして実施しました。

取組の実績

- 2年生1名、3年生～5年生が各2名、6年生1名が参加。
- 低学年・高学年で2日間に分けて実施。
- 各日13時～15時30分で実施。
- 定員10名のところ、応募は68名にのぼった。
- 区政を知ってもらう学びの機会にもなった。

「委嘱式」からスタートし、名刺交換、庁内の見学をして、最後に意見交換を！

スケジュール／ノウハウ

- 検討開始は2023年10月から。2024年5月頃までは庁内の調整を行った。
- 参加者募集は6月27日から7月19日まで。
- 記者発表や広報よこはまによる周知のほか、小学校長会での周知依頼など様々な方法で広報を実施。
- 7月下旬に参加者を決定。実施は8月5日・8日。
- 例年のインターンシップや職業体験の受け入れから発展し、1日区長体験というアイデアが出た。
- 企画から実施まで青葉区職員のみで対応。こども家庭支援課の元教員の職員から、こどもへの対応のアドバイスをもらいながら具体化していった。

一人ひとりに名刺をつくり、
名刺交換をしました

point 1 「1日区長」の内容は？

「1日区長に任命します」という委嘱式からはじまり、区長とこどもたちとの名刺交換を行いました。さらに区長室や区庁舎の見学、土木事務所の道路パトロールカーの乗車体験を実施。その後、青葉区の特徴を職員から話したうえで「青葉区がこんなまちになってほしい」といったアイデアをこども同士で30分ほど出し合い、最後にこどもたちの柔軟なアイデアや意見を、一人ひとりが区長に向けて発表。区長も一人ひとりにコメントを返しました。

point 2 意見を出しやすくする工夫

家庭内でも話し合えるように事前に意見交換のテーマを伝え、当日は「公園で遊ぶときに気になっているところや困っていることはないか」といった、イメージしやすい言い回しでサポートしました。名刺も、職員がふだん使用しているものと同じデザインにして、区役所を身近に感じてもらえるよう工夫しました。また人数も1回あたり5名までの少人数で実施し、意見を言いやすい環境をつくりました。

point 3 パネル展示や庁内への共有

1日区長体験終了後は、いただいた意見を青葉区のホームページで公開しました。また区庁舎1階展示スペースで、当日のプログラムやこどもたちの声をパネルで掲示し、区役所各課にも共有。職員や区民の方々に広く意見を共有しました。

青葉区役所1階展示スペースの様子

青葉区区政推進課の職員

意見交換では、意見を出してもらえるか心配はありましたが、事前に考えてきたことやほかの参加者の声を聴いて考えたことを、積極的に発言してもらいました。「雨の日でも暑い日でも遊べるドーム型の公園がほしい」「道や川を綺麗にしたい」「観覧車などのシンボルをつくりたい」などが印象的でした。青葉区の説明として、人口や面積などもお伝えしたので、学習の機会にもなったのかなと思います。また、こどもならではの意見を聴けたことがとてもよかったです。

意見の取扱い

- 青葉区ホームページでの公開。
- 区庁舎1階スペースでの展示。
- 区役所各課へ共有し、今後の取組の参考とする。

課題と展望

- 募集人数に対し応募が大きく上回り、お断りする方が多くなってしまった。
- 夏休み中は気温が高かったので、こどもたちの安全性の確保に留意が必要だった。
- 今回のノウハウを今後の職業体験等の受け入れに生かしたい。

CASE 11

出前授業

「にこまちプラン」啓発事業 小学校への出前授業

小学校出前授業の様子

主管課　**西区福祉保健課**

取組時期：2018年～
参加者数：区内の小学校2校（5・6年生）／計7クラス／
計約250名（2024年度）

取組の概要

第4期の「にこまちプラン（にこやかしあわせくらしのまちプラン／西区地域福祉保健計画）」のこども啓発事業の一環として、総合的な学習の時間を活用した小学校への出前授業を行っています。このほかに、中学生の区役所職場体験の中でのミニ講座や、オリジナル啓発ノート・プランのこども概要版を作成・配布し、こどもを対象とした啓発を進めています。

取組の背景・経緯

以前は講演会形式をとっていた「にこまちプランの啓発講座」を、2021年からは出前授業（アウトリーチ）で実施しています。イベントとして開催するよりも、小学校へ出向いた方が、こどもたちも参加しやすく、直接対話できるという理由から、出前授業がスタートしました。西区では、地域に関わるさまざまな場面で、こどもと接点をもつ取組を、継続していきます。

取組の実績

- 2018年度以降、地域の小学校1～4校が参加。
- こどもたちがアウトプットとなる企画を作り上げていくなかで、行政だけでなく、地域の大人も、こどもの声を直接聴くことができた。
- こどもたちが「地域のために自分たちにできることはないか」を考え実践してくれること自体が、にこまちプランが目指す「地域のつながり」づくりになっている。

コンパクトな西区だからこそ、地域と密に関係を築いています！

スケジュール／ノウハウ

- 小学校長会を通して、区内の学校に出前授業実施の募集を行い、5月・6月ぐらいに出前授業を実施。
- 出前授業をきっかけに、総合的な学習の時間を活用し、こどもたちがイベントなどを企画。イベントの実施は秋から冬にかけて、段階的に実施されている。
- 出前授業づくりは委託せず、西区職員が企画・実施を担います。こどもたちに伝わりやすい講義内容となるよう少しずつ更新している。

謎解きしながら地域の名所をまわる「TOBEクエスト」（上）
ケアプラザを利用する高齢者と協力して開催した「うどんレク」（下）

point 1 出前授業の内容は？

クラスごとの興味・関心事にあわせながら、「にこまちプラン」のなかで特に伝えたいポイントを、シンプルに伝える工夫をしています。「地域のつながりが大事」と伝えたい場合、「つながる」の反対語はなんだろう？　「孤独」を無くすためにはどうしたらいいと思いますか？　など、こどもたちの考えを少しずつ掘り下げながらコミュニケーションをはかっていきました。結果として、つながりの大切さを実感してもらうことができました。

point 2 アウトプットのかたちはさまざま

出前授業をきっかけに、こどもたちが、総合的な学習の時間を使って、西区の地域にアプローチする企画を考えてくれました。アウトプットも「謎解き」「スポごみ」「リアル街歩きゲーム」「うどんレク」「ミュージカル」などさまざま。区役所は、その実現に際して商店街や地域の施設とつなぐ調整役を担い、こどもたちの取組がうまく進むよう、個別のサポートを行っています。

point 3 率直なリアクションを受け取る

同じ授業を行っても、学校によって、クラスによって、リアクションが異なります。西区では、こどもたちからの率直なリアクションを楽しみながら取組にあたっています。出前授業や、そのアウトプットまでの過程で受け取ったこどもたちの声は、次年度が策定年度となる次期（第5期）「にこまちプラン」へ反映を検討するほか、必要に応じて、関係する部署へフィードバックをしています。

西公会堂を感動の渦に巻き込んだミュージカル「にこまちの光」

西区福祉保健課の職員

伝えたいのは「地域に愛着をもってほしい」というメッセージ。出前授業を受けたこどもたちは、わたしたちが思いもよらない、想像もしていなかったアウトプットを発想してくれました。これからも「区役所と関わってよかった」と思っていただけるように一生懸命努力して、それがまた他校の参加を促すきっかけになっていけばうれしいです。

意見の取扱い

- 2025年度が策定年度となる次期（第5期）「にこまちプラン」への反映を検討する。
- 必要に応じて、庁内の関係する部署へ、個別のフィードバックを行っている。

課題と展望

- 出前授業で「にこまちプラン」の内容を全て伝えるのは難しいが、このプランで大事にしている「つながり」の大切さを考えてもらうきっかけになってほしい。
- 今年参加校が増えたのは、他の学校に実施校の良い評判が伝わったもので、引き続き参加したくなるような取組を進めていく。
- 地域においては、担い手の高齢化や人手不足が共通の課題となっている。こども向け啓発を通じてこどもたちやその親世代（現役世代）の参加意識を醸成し、新たな担い手の発掘・育成につなげたい。

発行元：こども青少年局企画調整課
問合せ先：045-671-4281